

## 出張診療、各地で始動

【シヨクジャカルタ（インドネシア）】池田証志「ジャワ島中部地震で医療救援活動を展開している国際協力機構（JICA）は、最大の被災地バントウル県内の寒村地帯で出張診療（モバイル診療）を始め

た。国際医療援助団体「AMDA」（本部・岡山市）も、プラベンで巡回検診を行っている。初期治療の需要がより大きいとみられる小さな村落を直接訪問して被災者の治療にあたっている。

## 爪あとと深い山村、被災者安堵

第に狭くなり、やがて舗装もなくなった。家屋の倒壊は、その度合いを強めていく。バントウル県ブタン地区。わずか70世帯が、山間に寄り添うように集まった農村で、死者が13人、重傷者25人が出たという。車を降り、竹やぶを抜けると、青いビニールシート製の6畳ほどのテントで、左の鎖骨を折ったトフィックさんが横になっていた。富岡さんが傷口を洗浄した後、包帯で患部を固定。「本当は手術した方がいいが、1カ月したら固まりますから」と伝えた。

地震を感じたトフィックさんは真っ先に家を出たが、妹がいないことに気づき、再び屋内へ。タンスの下敷きになっていた妹を助け出し、逃げたそうとしたところで崩れた壁に襲われた。妹のスハルティさん（20）は「兄は先に逃げる」と言ってくれた。泣きたいくらい感謝している」と涙ぐんだ。一方、AMDAの医師と看護師計9人は先月31日から、プラベンのペレ村で巡回診療を開始。このほか、医療法人「徳洲会」の医師らはバントウル県ジェティス地区近隣の村落を視察。日本政府の緊急援助隊は2日、シヨクジャカルタ東方の村で巡回診療を行うことを検討している。



震災で鎖骨を折った青年を診察する医師の富岡譲二さん（中央）＝1日午前9時（現地時間）、ジャワ島バントウル県ブタン地区（早坂洋祐撮影）

「遠い日本から助けに来てくれてありがとう」。安堵の表情を浮かべたトフィックさん（24）から感謝の言葉を贈られたのは、JICAの医師、富岡譲二さん（45）。幼少期に震災に遭遇した過去を持ち、「自分の経験を役立てたい」とジャワ島へ来た。

診療団は、外務省地域調整官の島薫団長以下計7人。1日午前8時（現地時間）、診療キットが入った約50センチ四方のジュラルミン箱を載せたワゴン車2台でバントウル市内の病院を出発。警察の先導で山間部へ。道は次